京阪方言における補助動詞「おく」の＜持続＞用法
—明治末期以降の口語的資料に基づく考察—

梁井　久江

1. はじめに

現代共通語の補助動詞「おく」[1]は、時間性の観点から見ると、①設定時[2]以前に行われた行為が設定時において効力を持つ＜効力作成＞と、②設定時まで一定の状態を持続させる＜持続＞という、2 つのアスペクト的意味を表す[3]。このうち前者については特に制限はないが、後者については「主体動作客体変化動詞」に付き＜客体変化の結果維持＞を表す場合に限られるとされる（高田 1999）。

(1)　a.　換気のため　営業開始時刻までに　窓を　開けておく[4]。＜効力作成＞

　　b.　換気のため　しばらく窓を　開けておく。＜持続／客体変化の結果維持＞

(2)　a.　始業のベルが鳴るまでに　　関連資料を　読んでおく。＜効力作成＞

　　b.　*始業のベルが鳴るまで　　関連資料を　読んでおく。

これに対し西日本の多くの方言では、補助動詞「おく」の表す＜持続＞の意味自体が広く、前接動詞も「主体動作客体変化動詞」に限定されていない（田口 1992、高田 1999、山部 2005a,b）。例えば、大阪方言では、(3)(4)のような＜客体変化の結果維持＞の他に、(5)(6)のような＜主体変化の結果維持＞や(7)(8)のような＜動作過程継続＞をも表すことができる（高田 1999）。さらに、同方言を含む京阪周辺地域で用いられる補助動詞「おく」は、＜始動＞、つまり、動作・変化の開始時点にとりわけ関心を持つ形式であることも指摘されている（沖 1996）。

(3)　{8 時まで／しばらく}窓を開ケトク。　　（高田 1999:59(22a)）

(4)　雨が上がるまでカバーをカブセトコ。　　（同:59(23a)）

(5)　（徹夜して）5 時まで起キトク。　　（同:60(24a)）

(6)　{授業が終わるまで／しばらく} 廊下に立ットケ。　　（同:60(26)）

---

[1] 本稿では、主動詞に続く「おく」を「補助動詞「おく」」と総称する。

[2] 「設定時」(reference time)とは、出来事(event)を眺める基準点を指す（金水 2000）。

[3] ＜効力作成＞は、金水(2000:69-70)の「設定時以前に達成された意志的な行為が、なんらかの効果を狙って行われた＜準備＞の意味を含むものである」ことを表す「抽象的なパーフェクト的意味」にほぼ相当する。他方、＜持続＞に類似する概念としては「結果の維持」（日本語記述文法研究会（編）2007:52）があるが、結果後の状態維持だけに限らない点で、＜持続＞の方が「結果の維持」より扱う範囲は広い。

[4] 以下、例文中の下線による強調は、全て筆者によるものである。

(7)　（図書館で本を借りる間待っているように言われて）
いいわ、（図書）検索のとこで遊ンドクわ　（同:59(20)）

(8)　（行動をなかなか起こさず躊躇している相手に対して）
やるんやったらやる！やらへんのやったらまっすぐ見トク！　（同:59(21)）

興味深いのは、こうした意味拡張の度合いは西日本諸方言の間でも異なっている点である（工藤 1999、山部 2005a,b）。この意味拡張の程度差について、梁井(2011)では基本的なアスペクト体系の相違という観点から検討した結果、存在動詞「おる」由来の形式を含み、完成相・不完成相・パーフェクト相の 3 者が対立する「3 項対立オル型」の一部の方言と、存在動詞「いる」由来の形式を含み、完成相・継続相の 2 者が対立する「2 項対立イル型」の方言において、特に意味的な拡張が進んでいることを明らかにしている。

本稿では、梁井(2011)で考察が不十分であった 2 項対立イル型の方言のうち、明治末期以降の口語的資料を有する「京阪方言」[5]を取り上げ、補助動詞「おく」の＜持続＞用法の拡大過程を検討する。まず第 2 節で、京阪方言の属する 2 項対立イル型の基本的なアスペクト体系の特徴を概説し、分布状況を確認する。次に第 3 節で、2 項対立イル型の方言における補助動詞「おく」の＜持続＞用法の範囲について、現代共通語の補助動詞「おく」との差異に焦点を当てながら提示する。第 4 節で利用した資料の性格や調査方法について説明した後、第 5 節で通時的な考察を行う。最後にまとめと今後の課題を示す（第 6 節）。

2.「2 項対立イル型」の基本的なアスペクト体系と分布状況

ここでは、2 項対立イル型の基本的なアスペクト体系の特徴について、先行研究の記述を要約する形で振り返った後、当タイプに属する方言の分布状況を確認する。

前節で述べたように、2 項対立イル型は完成相と継続相の 2 者が対立するタイプであり、その点では東日本諸方言と共通している（工藤 2001b）。しかし、ここで注目されるのは、完成相・継続相を担う形式が待遇的な価値の違いに応じて異なる点である（表 1）[6]。まず、待遇的にマイナスの場合、存在動詞「おる」を語彙的資源とするシ

[5] 本稿では、沖(1996)を参考にし、京都・大阪を中心とした関西圏のことを便宜上「京阪方言」と呼ぶ。この名称は、方言区画論におけるカテゴリとしての区分名ではない点を断わっておく。

[6] 2 項対立イル型の方言では、非情物を主語とする場合、存在動詞「ある」を語彙的資源とするシタール形（シテアル形）を用いる。当タイプのアスペクト体系の全体像を見渡すためには、このシタール形の存在を無視することはできないと考える。しかし、本稿で扱う補助動詞「おく」の＜持続＞用法は人を主語として意志的に用いられる場合に限られているので（梁井 2011）、非情物主語を要

ヨル形とシトル形がそれぞれ完成相、継続相を担っている。この 2 形式は、形態こそ 3 項対立オル型の形式と同じだが、基本的な体系内での位置づけが全く異なる（工藤 2001a）。また、待遇的に中立な場合に用いられる継続相のシテル形（シテイル形）についても、存在動詞「いる」を語彙的資源とする点では現代共通語のそれと変わらないが、3 項対立オル型のシヨル形・シトル形と共通した特徴を有しており、「気づかれにくい方言」になっていることが指摘されている（沖 2001）。

表 1　2 項対立イル型の基本的なアスペクト体系

テンス＼アスペクト		完成相	継続相
非過去	待遇・中立	スル形	シテル形
	待遇・マイナス	シヨル形	シトル形

（工藤 2001a:32 をもとに筆者作成）

以上のような特徴を持つ 2 項対立イル型の方言は、沖(2001)によれば、京都府、大阪府、奈良県といった「中近畿」に分布しているとされる[7]。

3. 2 項対立イル型の方言における補助動詞「おく」の＜持続＞用法の範囲

ここでは、2 項対立イル型の方言における補助動詞「おく」の＜持続＞用法の範囲について、現代共通語の場合との差異に焦点を当てながら提示する。

まず、現代共通語の補助動詞「おく」が持つ＜持続＞用法の範囲を示す。第 1 節で述べたように、現代共通語の補助動詞「おく」は、(9)のように、「主体動作客体変化動詞」に付き＜客体変化の結果維持＞を表す（高田 1999）。また、当該の事態に対して主体の積極的な関与が見られないという点で限定的ではあるが、「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」（大場 2004）に後接する場合にも＜持続＞の

求するシタール形は考察の対象外とする。

[7] 楳垣実(1962)「近畿方言総説」（『近畿方言の総合的研究』三省堂）の記述を参考にした沖(2001)は、方言区画から言えば「中近畿」には東近畿方言（若狭・近江・北伊勢・伊賀・山城・口丹波）と西近畿方言（北大和・摂津・河内・和泉・播磨・淡路）が含まれるが、アスペクトから見た場合は、その全域ではなく狭い範囲に限られると述べている。実際、基本アスペクト体系による分類に従えば、西近畿方言の神戸市や相生市は 3 項対立オル型、東近畿方言の津市は 2 項対立オル型である（工藤（編）2000,2001、梁井 2011）。

意味が表せる（(10)～(12)）。

(9)　しばらく窓を開けておきなさい。　＜客体変化の結果維持＞

(10) しばらく放っておけ。　＜放任・維持＞

(11) 部屋の中は散乱していたが何も触れないでおいた。＜放任・維持＞

(12) 話し合いの間子ども達は庭で遊ばせておこう。　＜放任・維持＞

他方、2 項対立イル型の方言に目を向けると、補助動詞「おく」は＜客体変化の結果維持＞以外に、＜主体変化の結果維持＞、＜動作過程継続＞、＜状態持続＞、＜変化過程継続＞を表すことができる。

(13)（(3)再掲）｛8 時まで／しばらく｝窓を開ケトク。＜客体変化の結果維持＞

(14)（(5)再掲）（徹夜して）5 時まで起キトク。　＜主体変化の結果維持＞

(15)（(7)再掲）（図書館で本を借りる間待っているように言われて）

いいわ、（図書）検索のとこで遊ンドクわ　＜動作過程継続＞

(16) ジュギョーガ　オワルマデ　マットケ　＜状態持続＞（沖 1996:34）

(17)（外出の際、一緒に出かける相手の支度が遅いので先に出かけると伝える時、相手が追いかけてくるのを積極的に待たず先に歩き始める場合[8]）

サキニ　イットクデー　＜変化過程継続＞（沖 1996:37）

ただし、2 項対立イル型の全ての方言で以上全てを表せるかどうかは、報告により違いがある。例えば、大阪方言では、「主体動作=客体変化動詞＜一時変化型＞」に後接する補助動詞「おく」は、＜持続＞用法としては、(13)のような＜客体変化の結果維持＞しか表しえないとされる（高田 1999:66-67）。ところが奈良県橿原方言では、同じ動詞でも(18)のように＜動作過程継続＞を表せる（梁井 2011）。また、高田(1999)には＜変化過程継続＞を表す例は見当たらないが、上の(17)により、京阪方言でも＜変化過程継続＞を表しうることがうかがえる。さらに、＜動作過程継続＞や＜変化過程継続＞を表すのに、「かける」と連続させたシカケトク形を用いる方言もある（(19)）[9]。

(18)（先に教室に行って窓を開け始めるよう命じて）

アケトキ　＜動作過程継続＞　（工藤（編）2000:322）

(19)（遅れそうなので先に行きつつあるよう命じて）

---

[8] この場合、現代共通語の補助動詞「おく」と異なり、先に行って切符を購入しておくような＜準備＞の含意はない（沖 1996）。

[9] (18)は橿原市の中井精一氏（調査時 38 歳）、(19)は奈良市の池田英喜氏（調査時 36 歳）の内省資料による。詳細な話者情報は工藤（編）(2000,2001)参照。なお、奈良県高取方言のように、補助動詞「おく」が＜動作過程継続＞等を表さない方言もある（梁井 2011）。

イキカケトイテ　　＜変化過程継続＞　（工藤（編）2000:278）

また、京阪方言の話者への聞き取り[10]で、補助動詞「おく」が思考動詞の一部や存在動詞の「いる」に後接し＜持続＞を表すことも確認されている（梁井 2010）。以下では、思考動詞に後接する(20)のような補助動詞「おく」を＜動作過程継続＞、「いる」に後接する(21)の補助動詞「おく」を＜状態持続＞の、それぞれサブクラスとし、適宜言及することにする。

(20) 離れててもあんたのことずっと思っとくわ。　＜動作過程継続＞（梁井 2010:74）

(21) しばらくそこにいといて　　＜状態持続＞　（同:74）

以上のような差異が地域差によるものなのか世代差等他の要因によるものなのかは、データ不足のため今のところ分からない。しかし、いずれにせよ 2 項対立イル型の方言において補助動詞「おく」の＜持続＞用法がよく用いられていることは推察される。

なお、京阪方言の補助動詞「おく」の場合、否定動詞に後接し否定意志を表す用法が発達しており（高橋 1994）、打ち消し意志表現として「セントク」、禁止表現として「セントキ」「セントイテ」という形式が使用されている。現代共通語の補助動詞「おく」にはない明らかな用法の拡大が認められると言えるが、これらの形式の体系上の位置づけについては不明な点が多いため、本稿ではひとまず＜放任・維持＞のサブクラスに入れておく。

ここまで述べてきたことをまとめると表 2 のようになる。○は可、×は不可を表す。

表 2　現代共通語と 2 項対立イル型における補助動詞「おく」の＜持続＞用法の可否

	現代共通語	2 項対立イル型
客体変化の結果維持	○	○
主体変化の結果維持	×	○
状態持続	×	○
（存在動詞）	×	※報告有（梁井 2010）
動作過程継続	×	○
（思考動詞）	×	※報告有（梁井 2010）
変化過程継続	×	※報告有（梁井 2011）

[10] 話者は、1977 年生まれの女性。兵庫県赤穂市（0～11 歳）、京都市伏見区（11～18 歳）で、それ以降は進学・就職・結婚により、海外も含め数年単位で引越をしている。2008 年より大阪市在住。

（主体の関与が希薄）放任・維持	○	○
（放任動詞、否定動詞、使役動詞）	○	※打消意志・禁止に用法差

以上を踏まえ、次節からは、2 項対立イル型の方言の一つであり、明治末期以降の口語的資料を有する京阪方言を取り上げ、補助動詞「おく」の＜持続＞用法がどのようにして意味的に拡張してきたのかを見てみたい。

4. 調査概要

明治末期以降の口語的資料を用い、補助動詞「おく」の用例を登場人物の台詞部分または会話部分から採取した[11]。利用した資料は次のとおりである。

a. 明治末期～大正期の大阪落語 SP 盤の文字化資料[12]（明治 36-大正 15 年頃収録）
『馬部屋』『盲の提灯』『後へ心がつかぬ』『鋲盗人』『恵比須小判』『日と月の下界旅行』『動物博覧会』『絵手紙』『近江八景』『小噺』『たん医者』『近日息子』『倹約の極意』『芝居の小噺』『天神咄』『魚売り』『亀屋左兵衛』『蛸の手』『きらいきらい坊主』『煙管返し』『いびき車』『芋の地獄』『さとり坊主』『日和違い』『電話の散財』『一枚起請』『いらちの愛宕参り』『魚尽し』『筍手討』『平の蔭』『理屈あんま』『やいと丁稚』『浮世床』『長屋議会』（以上、真田・金沢（編）1991）

b. 昭和前期の二代目桂春団治「十三夜」ライブ録音文字化資料[13]（昭和 26-27 年収録）
『阿弥陀池』『猫の災難』『壺算』『打飼盗人』『祝いのし』『豆屋』『二番煎じ』『按摩炬燵』『青菜』『近日息子』『写真屋盗人』（以上、金沢（編）1998）

c. 昭和前期の方言談話資料（昭和 28 年収録）
・京都府京都市室町談話　参加者：m（明治 29 年生・男）、f（明治 34 年生・女）
・大阪府大阪市中船場談話　参加者：m（明治 31 年生・男）、f（明治 21 年生・女）
（以上、日本放送協会（編）1981）

[11] 京阪方言の場合、主動詞と連接するにあたり、普通「シトク」のように母音の融合した縮約形が用いられる。本稿ではこうした縮約形も調査対象とした。また活用形に関して、現代の大阪方言では文末においてタ形の容認度が落ちることが指摘されている（高田 1999）が、本稿では全ての活用形を調査対象とした。
[12] 資料の詳細は、真田・金沢（編）(1991)を参照されたい。
[13] 資料の詳細は、金沢（編）(1998)を参照されたい。

d. 昭和末期の方言談話資料（昭和 52・58 年収録）

・京都市中京区談話（昭和 58 年収録）参加者：A（昭和 2 年生・男）、B（明治[14]37 年生・男）、C（大正[9]14 年生・男）、D（昭和 9 年生・女）（収録時 49 歳）、E（明治 37 年生・女）（収録時 73 歳）、F　（大正 1 年生・女）（収録時 69 歳）

・大阪府大阪市東区（現・中央区）談話（昭和 52 年収録）　参加者：A（大正 3 年生・男）、B（明治 33 年生・男）、C（大正 1 年生・男）、D（明治 31 年生・男）、E（明治 37 年生・女）、F（明治 38 年生・女）

（以上、国立国語研究所（編）2001-2002）

上記のうちの a と b は、大阪落語の文字化資料である。そのため、その当時の話しことばをどれだけ忠実に描いているか不明である点、ことばそのものが保守的になる可能性が高い点で、その資料性に問題もある（金沢 1991）。しかしながら、収録された明治期から昭和前期の京阪方言の資料が乏しい中で、「会話形式が中心」で「当時の市井の庶民のことばを反映している可能性が高い」（金沢 1991:23）落語資料は、口語的資料として価値が高いと考え、利用することとした。

なお本稿では、同じ大阪落語でも速記資料は利用しなかった。これは、速記記号を普通の文字表現に直す速記法が、どれだけ忠実に行われていたかわからない実情を考慮したためである[15]。

また、補助動詞「おく」の＜持続＞用法は、依頼や命令、意志、勧誘といった文脈でよく用いられるのだが[16]、a から d に共通してそうした文脈での発話自体がさほど期待できない点は留意しておかねばならない。特に、参加者同士の対談を主とする c と d ではその傾向が強いと言える。

5. 用例の検討

5.1 明治末期から大正期の大阪落語 SP 盤の文字化資料

明治末期から大正期の大阪落語 SP 盤の文字化資料における補助動詞「おく」の用

[14] 原文は「昭和」となっているが、収録時の年齢により修正した。

[15] 東京語の研究では『怪談牡丹燈籠』等の速記資料が用いられているし、大阪語についても金沢裕之氏の一連の研究（金沢 1991,1999 他）で速記資料が用いられてはいる。

[16] 本稿の例文の他、自然傍受法によって収集された京阪方言の例（沖 1996）や、各地方言における調査例文（田口 1992、高田 1999、工藤（編）2001、山部 2005b 他）を参照されたい。

例数は、24 例である。そのうち 18 例が＜効力作成＞用法、残る 6 例が＜持続＞用法である[17]。この 6 例を以下に示す。(20)(21)は＜客体変化の結果維持＞、(22)～(24)は＜放任・維持＞をそれぞれ表している。(20)(23)を例にとって説明すると、(20)は話者「源さん」がいつも参詣している毘沙門天からお告げを受けている場面で、「源さん」に福を与える余裕があるなら大きな賽銭箱を出した状態にしていないということが述べられている。つまり、この例は「賽銭箱を出す」という客体変化後の状態の維持を表していると考えられる。また、(23)は「放る」という放任を意味する動詞への後接例であり、現状をそのまま維持することを表していると考えられる。

(20) オマエマインチ　ワシノウチエ　フククレーチューテ　キテクレテヤケドモ
オマエニフクアゲルクライナー　ワシトコワコナイナ　オーケナサイセンバコ
ダシテオカンチューン。（『恵比須小判』p.29）　＜客体変化の結果維持＞

(21) ソ　ナニオユーネヤ　バントー。ワシネキーオイトイテ　ジジゴクドーヤナンテ（『電話の散財』p.118）　＜客体変化の結果維持＞

(22) サー　ホットケマセン。オトツイフロデオータガ　オモシロイコトユーテ
オイデンナッタンデッセ（『近日息子』p.55）　＜放任・維持＞

(23) ホットイテ　モライマヒョカイ。（『理屈あんま』p.152）＜放任・維持＞

(24) マ　マタノユーノニワ　キミ　イカンヤナイカ　オヤジ　アーユーコト
サイトイテ。（『電話の散財』p.113）　＜放任・維持＞

次の(25)は、「ワシ」が、手を叩いてではなく、頭を使って音を出し続けていた、ということが表されている。使役動詞が補助動詞「おく」に前接してはいるものの、使役文としての解釈が成り立たないため、ここでは「音をさせる」という事態の継続と捉え、＜動作過程継続＞の例であると考える。

(25) イヤ　ワシナー　テータタイテヤロート　オモタケド　アタマデオト
サシトイタッタンヤ。エライオモシロイ　オモシロイ。（『電話の散財』p.122）
＜動作過程継続＞

5.2 昭和前期の二代目桂春団治「十三夜」ライブ録音文字化資料

昭和前期の「十三夜」ライブ録音文字化資料における補助動詞「おく」の用例数は、92 例である。そのうち＜効力作成＞用法の確例が 62 例、＜持続＞用法の確例が 29 例、文脈上どちらの用法とも判断しうる例が 1 例である。この 1 例を合わせた＜持続＞用

[17] ＜効力作成＞用法については、用例数のみを示すこととし、文脈から＜持続＞用法とも読みとれるような例を除き、特に言及しないものとする。

法の例を見て注目されるのは、＜動作過程継続＞の用例数が 9 例と、＜客体変化の結果維持＞（6 例）や＜放任・維持＞（12 例）の用例数と同程度に見られる点である。

以下、まずは確認まで＜客体変化の結果維持＞と＜放任・維持＞の例を 1 例ずつ挙げる。(26)は、父親から使用予定のない湯棺桶を返却して来るよう言われた息子が、今年の暮れまで自宅に保管してはどうかと提案している場面で、湯棺桶を置いた後の状態の維持が表されている。

(26) ヒャハハー　エー　ナンナラ　コトシノクレマデ　オイトキマシタラ　マタナニカノマニアイマスト　オモイマスガ　（『近日息子』p.212）
＜客体変化の結果維持＞

(27) オシバイ　イツヤッリャワカリマシェン。ショーバイ　イツヤルヤワカランカラチューテ　オモテホッタラカシトイテワ　フアンガワスレテシマウ
（『近日息子』p.205）　＜放任・維持＞

次に、(28)～(34)に＜動作過程継続＞を表す 9 例を全て挙げる。(28)は、植木仕事で訪れた良家の立ち居振る舞いに感心し、その姿をまねて友人を驚かせようとしている場面である。良家のまねを見続けているよう友人に依頼していると捉えられるため、補助動詞「おく」は「見る」という動作の継続を表していると考えられる。(29)は、家を訪ねてきた隣人の女性に対し、自分の醜い顔を朝晩に鏡でよく見ているように悪態をついている場面である。(30)は、隠居に聞いた与太話を友人に披露するため、最後まで話を聞いているように注意をひきつけている場面である。それぞれ「見る」「聞く」という動作の継続が表されている。

(28) ヤ　ヤカマシ　ヤカマシ　コ　コレカラヤコレカラヤ　ミトイテクレ　ミトイテクレ　エーシノマネヤ。（『青菜』p.201）　＜動作過程継続＞

(29) ヨーソノツラデ　マルマゲニイーヤガッタナー　ンフフフフフフフ　ンフンフ　ンフアサ　アサ　エウー　アサバンニカガミオミトケ　オノレノツラオバ　バカメ。（『猫の災難』p.50）　＜動作過程継続＞ ＜効力作成＞

(30) キータ　アノ　エヘン　オ　オイ　シッカリキートイテクレヨー　コレ　オイ。オレ　アセカイテユーテンネヤサカイ　シッカリキートイテクレヨ　オマエ。ボーントオマエ　シンゾーツカレテ　ゴローット　ヒックリカエッタンヤロナ　ホタ　ドーットヌスットガオキアガッテ　オッサンノクビ　ズボーットオトシテ　ヨコテニアッタ　ヌカバコノナカエ　クビホーリコンデシモテルネンデ　クビオ。クビオヌカバコンナカホーリコンデ　シューットニゲテシモーテ　イマダニ　イキガタガワカランチュノヤ。コンナン　キータカチュネ

ン（『阿弥陀池』p.30）　＜動作過程継続＞ ＜効力作成＞

(31)は文脈上＜持続＞用法と＜効力作成＞用法のいずれか判断しかねる例である。友人の与太話を真に受けた話者「吉やん」が妻に、親類の子の奉公先へ行き、ことの成行きを話すよう命令している場面である。「吉やん」の帰宅まで奉公先で話をしているよう命令していると解釈すれば＜持続＞用法のうちの＜動作過程継続＞であるが、「吉やん」の帰宅までに話し終えるよう命令していると解釈すれば＜効力作成＞用法と判断される。

(31) ホンデオマンモ　トニカク　トニカクイセー　イセヤイケ。オレワ　クニモトエデンポーウッテ　ジキニイクサカイ。オマエサキイッテ　コーコーコーヤ ハナシトケ　ワカッテンナ。（『阿弥陀池』p.34）＜動作過程継続＞ ＜効力作成＞

この資料では、以上のような動作性の高い動詞だけでなく、長期的な活動を表す動詞（(32)の「飼う」）や、態度を表す動詞（(33)の「えらそうにする」、(34)の「ばかにする」）に後接し＜動作過程継続＞を表す例が出現しており、接続可能な動詞の多様化が認められる。

(32) ナルホドナ　カカー　ナンヤカンヤカンガエトンネンナ　オヤジワカイショーナイケド　アナイシテクオー　コナイシテクオート　ヤヤッパリニョーボチューモンワ　ヤッパリコートカンナランモンヤナ　ヘヘッ　エー。（『祝い熨斗』p.105）　＜動作過程継続＞

(33) ニシェンノカネニデモ　テンカーツーヨースル　ケッコーナ　ゴモンガ　ツイテマンネデ。コノゴモンガアリガトナイノカ　オマーン。（省略）オノレガマタ　ニシェンノゼニデ　ナカンナランヒガ　デテクルワ。ヘヘ　エラソーニデケルダケシトケ（『豆屋』p.136）　＜動作過程継続＞

(34) ナニヌカシテケツカンネン　エラソーニミンナシテ。コーヤッテ　マ　マ、バカニ　バカニシトケ　アホタレガ。ヘヘン…ム…ムコイッテカラ　ムコーノシンセキイチドーニ　オレガ　オドロクヨーナ　クヤミユーテコマシタル（『近日息子』p.220）　＜動作過程継続＞

この他、禁止を表す例が3例あることも指摘しておく。

(35) バ　バ　バントーハン　ワ　ワラーントイテ　ワラーントイテ　アンナ　アンナアホワ　オレノトモダッチャ　アハハハハ（『壺算』p.65）
＜禁止／放任・維持＞

(36) ヨケツガントイテ、チョットダケ。ヨ　モウソノグライ。（『猫の災難』p.37）
＜禁止／放任・維持＞

5.3 昭和前期の方言談話資料

昭和前期の方言談話資料における補助動詞「おく」の用例数は6例である。その全てが＜効力作成＞用法であり、＜持続＞用法の例は出現していない。

5.4 昭和末期の方言談話資料

昭和末期の方言談話資料における補助動詞「おく」の用例数は21例である。そのうち13例が＜効力作成＞用法、7例が＜持続＞用法の確例であり、残る1例が文脈上どちらの用法とも判断しうる例である。この1例も含めた＜持続＞用法の例を(37)〜(42)に示す。禁止を表す(42)を除けば、全て＜客体変化の結果維持＞を表す例である。現代共通語の場合でも表せる＜放任・維持＞の例と、5.2節で出現した＜動作過程継続＞の例は出現していないが、これは補助動詞「おく」の用例数自体が少ないこととも関わりがあるのかもしれない。

(37) 071A:アレー　ジューゴンチマデ　オイトカナイケマセンデッシャロー？

（京都市・昭和2年生・男）＜客体変化の結果維持＞

(38) 085A:（省略）デ　ソノー　イチバンシタノ、　オーキーヤツデストネー　アノー　シ　シトツノウスデワ、　デケシマセンネン。　（C　ンー）　デ　ツイトイテ　ヨコ　オイトイテ　フキン、　ヌレブキン　カケトイテ　モー　イッパツ　ツイテー、　（C　ンー）　ンデ　ツギノヤツノ　スコシ　キッタヤツオ　シギノナカエ　ブチコンデー　コー。　アーナッタ　ワンリョクデスナ。

（京都市・昭和2年生・男）＜客体変化の結果維持＞

(39) 186A:　ワタシ　イッペンダケー、　（E　フン）　アレー、　イッペン　ソノー、　ヒナワオ　モーテコー　ト　オモーテ　イキマシテネー。　（B　フン）　ソレデネー、　{笑}　ソレオ　ベツノヒニ　ウツシトクノ　ワスレマシテーアノー、　トーミョーニ。　（E　エー）　ソノママ　ダイドコ　ブラサゲトイタンデスワ。　（C　{笑}）　アサ　イッタ　ナンニモ　アラヘン。

（京都市・昭和2年生・男）＜客体変化の結果維持＞

(40) 204B:　イヤー　ズイブンネー　ムカシワ　アノー　カエリニー　チョットアノー　ギオンマチ　ヨッテネー　（E　ソーデャスネー）　（C　ウーン）　チョット　ア　{笑}　アズケトイテ　（E　{笑}）　（D　アズケトイテ？　{笑}）　（B・E　{笑}）　イッパイ　ノンデルウチニ。　（B・E　{笑}）　（A　ナクナッタ）　（B・E　{笑}）

（京都市・明治 37 年生・男）＜客体変化の結果維持＞

(41) 123A:　ネー。　テッタイサン〔23〕ヤラ　ミナ　キテー。　デ　ススハライガ　オワッタラ　コンドワ、　モチゴメ、　カシテ。（E　＊＊＊＊　＊＊＊＊ネー）　オケニ　ミズニ　ツケトイテー。

124D:　ネ。　カメニ　コーネ。　ズーット。　（A　ズーット　コー、ワケテ）

（京都市・昭和 2 年生・男）＜客体変化の結果維持＞ ＜効力作成＞

(42) 029A : ケド　ワタシラ　アノ、　トーキョ　イッタカテ　ソー、　（D　{笑}）　コレ　ナンボ　デ　トーシマシタガナー。（D {笑}）＊＊＊＊　ユワントケヨ　オマエ　オーサカベン　ンナン　ツカウナー　ユーテ。

（大阪市・大正 3 年生・男）＜禁止／放任・維持＞

5.5 用例調査のまとめ

以上の結果について、調査資料別の用例数を示した表 3 を見ながらふりかえると次のようになる。

表 3　調査資料別にみる補助動詞「おく」の＜持続＞用法の用例数

現在の 2 項対立イル型の補助動詞「おく」が表す＜持続＞用法の下位類	明治末期～大正期・大阪落語	昭和前期・大阪落語	昭和前期・方言談話	昭和末期・方言談話
客体変化の結果維持	2	6	0	7
主体変化の結果維持	0	0	0	0
状態持続	0	0	0	0
（存在動詞）	0	0	0	0
動作過程継続	1	9	0	0
（思考動詞）	0	0	0	0
変化過程継続	0	0	0	0
放任・維持	4	12	0	0
（放任動詞、否定動詞、使役動詞）	0	禁止 3	0	禁止 1

※文脈上＜効力作成＞用法とも判断しうる用例を含む。

まず、補助動詞「おく」の＜持続＞用法の下位類に注目すると、＜客体変化の結果維持＞と＜放任・維持＞という現代共通語の場合でも表せる用法に加え、京阪方言で

拡張を見せている＜動作過程継続＞と禁止表現が見られる。＜動作過程継続＞の用例は、早くは明治末期から大正期の大阪落語資料に見られ、昭和前期の大阪落語資料では、「見る」「聞く」「話す」という典型的な動作動詞のほか、長期的な活動を表す「飼う」、態度を表す「えらそうにする」「ばかにする」といった動詞に後接した例も見られるなど多様化している。ここで、＜主体変化の結果維持＞といった他の用法の用例が全く出現していないことも考慮すると、京阪方言における補助動詞「おく」の＜持続＞用法の拡大は、調査資料を見る限り、＜動作過程継続＞から始まったと考えられる。ただし、現在の 2 項対立イル型の方言に見られるような、思考動詞や「主体動作＝客体変化動詞＜一時変化型」への後接例は出現していないことから、当該時期において＜動作過程継続＞への用法拡大は見られるものの、その使用領域は現在ほど広がりを見せていなかったことがうかがえる。

6. おわりに

本稿では、明治末期以降の口語的資料を有する京阪方言を取り上げ、補助動詞「おく」の＜持続＞用法の拡大過程を検討した。京阪方言の属する 2 項対立イル型の補助動詞「おく」は、現代共通語の補助動詞「おく」でも表せる＜客体変化の結果維持＞と＜放任・維持＞に加えて、＜主体変化の結果維持＞＜状態持続＞＜動作過程継続＞＜変化過程継続＞をも表すことができ、用法拡大が進んでいる。しかし、こうした拡大用法のうち用例調査で確認できたのは＜動作過程継続＞と禁止表現のみであったため、現在に至るまでの用法の拡大過程を跡づけることはできなかった。用法拡大の詳細を明らかにするため、今後は、京阪方言を母方言とする作家による小説[18]を利用することにより、口語的資料そのものの僅少さを補いたいと考えている。

引用文献

楳垣実(1962)「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂

大場美穂子(2004)「補助動詞『おく』の使用制限についての覚書」『相模女子大学紀要 A 人文・社会系』68　相模女子大学

沖裕子(1996)「アスペクト形式『しかける・しておく』の意味の東西差—気づかれにくい方言について—」『平山輝男博士米寿記念論集　日本語研究諸領域の視点』明治書院

[18] 「大阪生まれ・大阪在住」の作家によって書かれた大阪を舞台とする小説については、八亀・木岡(2003)にリスト化されている。このリストを活用し、小説の用例調査を進めていきたい。

沖裕子(2001)「中近畿アスペクトについて」工藤（編）所収
金沢裕之(1991)「明治期大阪語資料としての落語速記本と SP レコード―指定表現を中心に―」『国語学』167　国語学会
金沢裕之(1999)「明治時代の大阪語におけるアスペクト形式『～かける』について」金沢裕之（研究代表）『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式―落語資料を中心として―』文部省科学研究費成果報告書　岡山大学文学部対照日本語学研究室
金沢裕之(2000)「近世以降の大阪語におけるアスペクト形式『～かける』について」変異理論研究会編『徳川宗賢先生追悼論文集　20 世紀フィールド言語学の軌跡』
金沢裕之（編）(1998)『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』平成十年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 09610427「明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式」研究成果報告書　岡山大学文学部対照日本語学研究室
金水敏(2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子（著）『日本語の文法 2　時・否定と取り立て』岩波書店
工藤真由美(1999)「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』11　大阪大学文学部日本学科（言語系）
工藤真由美(2001a)「調査研究の目的・方法と結果の概要」工藤（編）所収
工藤真由美(2001b)「アスペクト体系の生成と進化―西日本諸方言を中心に―」『ことばの科学』10　むぎ書房
工藤真由美（編）(2000)『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書　大阪大学大学院文学研究科
工藤真由美（編）(2001)『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書 2　大阪大学大学院文学研究科
国立国語研究所（編）(2001)『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成』第 11 巻　国書刊行会
国立国語研究所（編）(2002)『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成』第 13 巻　国書刊行会
真田信治、金沢裕之（編）(1991)『二十世紀初頭大阪口語の実態―落語 SP レコードを資料として―』平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究(B)課題番号 01450061「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究成果報告書　大阪大学文学部社会言語学講座
高田祥司(1999)「大阪方言におけるテオク形の用法―東京方言との対照を中心に―」

『現代日本語研究』6　大阪大学文学部日本語学講座
高橋太郎(1994)『動詞の研究　動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
田口聡子(1992)「大分県方言における『ヨク・チョク』の実態」『国語の研究』17　大分大学国語国文学会
日本語記述文法研究会（編）(2007)『現代日本語文法 3 第 5 部アスペクト第 6 部テンス第 7 部肯否』くろしお出版
日本放送協会（編）(1981)『全国方言資料』第 4 巻　日本放送出版協会
八亀裕美、木岡智子(2003)「大阪（小説用例）編」工藤真由美（編）(2003)『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』文部省科学研究費成果報告書 5（大阪（小説用例）編）　大阪大学大学院文学研究科
梁井久江(2010)「京阪方言における～テオクの＜持続＞用法－『主格維持性』の観点からの検討－」『日本語研究』30　首都大学東京・東京都立大学　日本語・日本語教育研究会
梁井久江(2011)「西日本諸方言における補助動詞『おく』の＜持続＞用法—用法拡大に関する考察—」『都大論究』48　東京都立大学国語国文学会
山部順治(2005a)「補助動詞『おく』の諸用法の共時的つながりと通時的拡張経路　第 1 部：標準語的な用法」『ノートルダム清心女子大学紀要　日本語・日本文学編』29-1（通巻 40 号）ノートルダム清心女子大学
山部順治(2005b)「補助動詞『おく』の諸用法の共時的つながりと通時的拡張経路　第 2 部—主語の状態が描写される」『清心語文』7　ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会

付記

本稿は、2009 年 8 月 29 日、有志による研究会である第 4 回日本語史研究の会（於東京大学）における発表をもとに加筆・修正したものである。発表の席上貴重な御指摘を賜った。記して御礼申し上げる。

また、末筆ながら、本研究で利用した各種文字化資料の作成に携わった方々に心より感謝申し上げる。

（やない　ひさえ・昭和女子大学非常勤講師）